安田女子大学紀要　45，1-10　2017.

視覚依拠の判断系助動詞が有する構造的概念

川　岸　克　己

On the Structural Concept Intrinsic to Propositional Auxiliary Verbs Based on Visual Reliance

Katsumi KAWAGISHI

要　旨

日本語の助動詞「ようだ」「みたいだ」「めり」の３つに，「視覚」を軸にした構造的な意味要素が存在することを論じる。これらの助動詞は，視覚を通して事象を「描写」することによって，主体とは距離をもったときに，言語主体が自らにとって否定的な意味内容を表現することを指摘する。ひとつの主体の意思とそれに反するもう一方の主体の意思，いわば「二重主体構造」を形成することを明らかにする。この「二重主体構造」現象の理由として，判断系の助動詞が，「主体」による「思惟」と，「視覚」による「描写」とを相対立するものとして区別していることを論じる。さらに論を進め，この「二重主体構造」を解体し，ひとつの主体の中にある，二つの判断形式，「思惟」と「描写」を区別する。この判断というものが主体の内部に根拠をもとめる「思惟」と，主体の外部に根拠を求める「描写」に区別されて構造化されていることを論じる。

キーワード：ようだ，みたいだ，めり，視覚，主体

1．は　じ　め　に

本論の目的は以下の通りである。まず，３つの助動詞「ようだ」「みたいだ」「めり」に，「視覚」を軸にした構造的な意味要素が存することを立証する。つぎに，この３つの助動詞の視覚による意味要素の存在は，より普遍的な構造的な概念に起因するものであることを論証する。最後に，その構造的な概念がさらに普遍的な概念であることを併せて考察する。

本論の構成は，以下の通りである。まず「ようだ」「みたいだ」「めり」，３つの助動詞を視覚的な意味要素の側面から，その特徴と関係について整理する。この整理に基づき，「ようだ」は「めり」と共通する意味構造を有しているかという問題を提起する。検証は，「ようだ」が受ける語句に否定的な意味要素を確認できるか否かであるとし，用例を分析することによって検証する。つぎに，３つに共通する意味要素を「主体」と「描写」の概念を用いて説明する。最後に，判断系の助動詞をも内包する構造について言及する。

2. 問 題 提 起

３つの助動詞「ようだ」「みたいだ」「めり」のそれぞれに共通点について整理し，提起すべき問題点を明らかにしたい。

2-1. 「みたいだ」と「めり」

「みたいだ」は，比況，例示，婉曲的断定として用いられる。一方で，「みたいだ」には，「みたいな。」といった表現があり，特異な用法であることが報告・考察されている。たとえば，佐竹秀雄1997では，「みたいな。」の例として，「休み時間，すっごく眠くて，机につっぷして爆睡してたの。気がついたら授業が進んでいて。先生が『起きましたか』って。起こしてくれようみたいな」という例をあげ，これを客観化表現と規定している。つまり，「起こして欲しい」というのは自分の考えではあるけれど，そうすることが普通ではないかという，自分自身の考えを離れた一般的な考えとして表現する。これは，その自分自身の考えを自分の意見から切り離して一般化（客観化）することによって，聞き手からの，たとえば「むしろ，授業が始まったら起きているのが普通ではないか」といった非難を回避するのが目的である。すなわち，「みたいな。」には，引用する語句に対して自分は関与していないという態度を取って，その語句を発話することによって生じる恐れのある聞き手からの反感や反発を回避するという意味を機能させている。

また，泉子・K・メイナードは，これを談話上の効果について，以下のように論じている。

> 類似引用は，根本的には他の会話導入文と同じように，引用内容を提示する話し手と，引用内容についてコメントする言語の主体が，同一人物である場合もそうでない場合も含めて，それぞれの声を表現するストラテジーである。それは，引用内容を語る主体と引用する主体の場の重複性を意味し，同時に，それぞれが表現する複数の視点の交差をも表現する。類似引用は声の多重性を実現し，話し手が自分のまたは他者の言語行為をある距離をもって客観的に見つめ，それにコメントする自分がいることを相手に知らせる表現効果を狙うストラテジーでもある。
>
> （泉子・K・メイナード『談話言語学』p184）

メイナード2004は，一つの文の中に複数の言語主体があって，言語主体がもう一方の言語主体の言語行為を「距離をもって客観的に」判断していることを表現すると解釈している。これは重要な指摘であり，この構造を「二重主体構造」と名付ける。話し手はこの表現によって，発話内容が自分自身の考えに起因するものではないことを表明し，発話によって生じるかもしれない聞き手の反発などを前もって回避する表現効果を発動させることができる。

「みたいな。」は，承ける語句の表す意味を話し手の考えや立場とは距離のあるものとしてあえて表明する機能を持つが，古典語の助動詞「めり」も，この「みたいな。」と同様の構造をもつことを，川岸1998「〈非主体的〉推量判断としてのメリ推量」にて論じたことがある。つまり，「めり」にも「みたいな。」と同様，「話し手が自分のまたは他者の言語行為をある距離を持って客観的にみつめ」るといった意味要素を持っているという点において，「みたいな。」と「めり」は共通する。

また，形態素の点から考えると，「みたいだ」は，「みたようだ」の短縮形であり，「見（み）」といった視覚と関係する形態素を含んでいる。古典語の判断系の助動詞「めり」には，上記の「みたいだ」と同様の意味機能があることを川岸1998で「断定やダロウのような〈主体〉そのも

のが根拠となる判断形態ではなく，判断のための根拠を〈視覚〉によって常に認識する形態である」と指摘し論じた。例えば，以下の用例，

(01) 母君「〜。かしこき仰せ言をたびたびうけたまはりながら，みづからはえなん思ひたまへ立つまじき。若宮は，いかに思ほし知るにか，参りたまはむことをのみなん思し急ぐめれば，ことわりに悲しう見たてまつりはべるまど，うちうちに思ひたまふるさまを奏したまへ。〜」とのたまふ。
（『源氏物語』桐壺）

(02) 中将「〜。わが心得たることばかりを，おのがじし心をやりて，人をばおとしめなど，かたはらいたきこと多かり。親など立ち添ひもてあがめて，生ひ先籠れる窓のうちなるほどは，ただ片かどを聞きつたへて，心を動かすこともあめり。
（『源氏物語』箒木）

(01) の言語主体（母君）の意思は，「みずからはえなん思ひたまへ立つまじき」という部分によって確認できる。帝の仰せではあるけれど，参内する気にはとてもなれない。しかし，「めり」が受けてる語句は，言語主体ではない若宮が主語となり，「参りたまはむことをのみなん思し急ぐ」と，若宮が参内したいという，言語主体とは異なる意思を持っていることが分かる。(02) では，言語主体（中将）は，「めり」によって表現されている「心を動かすこと」に関して，そのようなことがあってはならないのに，という，「めり」が受ける語句とは対立する意思をもっていることがわかる。

まとめるならば，視覚に依拠するというのは，こうした視覚に関する形態素を含む場合を指し，そのうえで，これらが二つの言語主体を内包し，一方は自分とは距離を持った立場を取るという意味構造を持つという点において共通しているということである。

2-2. 「ようだ」と「みたいだ」

「ようだ」は「みたいだ」と近似的な語彙である。視覚に依拠する助動詞の「ようだ」は，上記のような「みたいだ」や「めり」のように，視覚に関する形態素を含んでいないように思える。そういった点において両者は，一見無関係のように思えるが，「みたいだ」は「ようだ」よりも口語的であるというだけで，「ようだ」と「みたいだ」は，意味的に近似的であり，まったくの無関係とはいえないし，むしろ両者には意味要素は類似したものがあり，まだ解明されていない両者の関係性を感じさせるものがある。

川岸1997「現代日本語の判断体系における〈主体〉と〈視覚〉」において，判断系の助動詞語彙の全体的な構造を構築した。その結果，「ようだ」には，３つの要素があることが確認できた。その３つの要素とは，①主体的な判断を表さない〈非主体〉要素，②判断の根拠を視覚に求める〈視覚依存〉要素，③既に生じた事実に対する描写である〈既発現性〉要素である。この３つの要素のうち，②の〈視覚依存要素〉は，まさに「みたいだ」と同様の視覚に依拠するという点と共通するものといえる。

3. 仮　　説

3-1. 「ようだ」と「めり」

ここまでを整理すると，以下のようになるだろう。

「みたいだ」は「めり」と形態素的かつ意味要素的に類似する。そして，「ようだ」は「みたいだ」と位相的に異なるが，意味要素が類似する。となると，三段論法的に考えれば，「ようだ」

は「めり」と類似する可能性が出てくる。つまり，「ようだ」にも，「めり」と同様の，二つの言語主体を有して，一方の言語主体がもう一方の言語主体の言語行為と距離をとった客観的な表現をとることになるはずだ。となれば，本論で提起すべき問題は，「ようだ」は，「めり」（あるいは「みたいだ」）のように，二つの言語主体を有し，両者は相対立する関係になるかが解明されるかどうかとなろう。

3-2. 仮説

そこで，本論では，上記の予備的な考察を踏まえ，「ようだ」「みたいだ」「めり」に関して，以下のような仮説を立てる。

仮説：
「ようだ」は，「二つの言語主体」を内包する意味概念の構造を有し，受ける語句は否定的な意味を有するものとなる。

4. 検　　証

この仮説を検証するには，すでに自著論文で確認できている「めり」を除き，「みたいな。」だけでなく，そのもとの形態である「みたいだ」にも否定的な意味要素が存在することを検証する。そののち，「ようだ」にも否定的な意味要素が存在することを検証する。しかしながら，先に結論をいえば，「みたいだ」には先行論文によって指摘されているように，いわば否定的な意味要素が存在することは確認できるものの，本論で仮説として提示した「ようだ」の否定的な意味要素については，その現象を容易には確認できない。したがって，「ようだ」についてはさらに深く検証を加え，「ようだ」の否定的な要素が顕在化する場合（一人称との共起）に焦点を当てて検証する。最後に，比較対象のための検証として，視覚に依拠する助動詞ではない「だろう」の用例を検討し，そこに否定的な意味要素が偏在しないことを確認する。

なお，検証に用いたのは，現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）中納言及び少納言オンライン版（国立国語研究所）に収録されているテキストデータである。

4.1. 「みたいな。」

まず，「みたいな。」における「二重主体構造」を改めて確認する。「みたいな。」は，メイナード2004で指摘されたように，二重の主体が存在する。また，佐竹1997は，話し手の発話内容に対する責任を回避したり，軽減する機能があると指摘している。手始めにこの事実を確認しよう。

(03)「すごい高齢化ですよ。（私に向かって）「あんたのお父ちゃんも大きなったな」みたいな。（私の父親に対してさえ）子どもを見る目ですよね。ほんまの昔から住んでる人なんやろ」
（野入直美『民族関係における結合と分離』2002）

(04)「朝食のあとは運動もかねて近所の公園を散歩します，そんなときに自分に返るんです…みたいな。サワヤカで自然体で…もう，ぜ～んぶ「ウソつけーっ!」っていいたくなる。」
（飯島直子『ずっとこのまま愛せたら』1996）

(05)「たまってるオレは東京人で，東京人というのが大人で，カッコイー，スマート，みたいな。そういうバカな公式を作ってるよね。 そう考えると，やっぱ大阪の人間は子供やけど，」
（松本人志『松本人志愛』1998）

（03）は，自分の「お父ちゃん」は当然ながらすでに成人しているわけで，身長が伸びるような年ではない。これは父親の子供の頃を知っているがゆえの発言であり，「お父ちゃん」の子どもである話し手にとっての現実からは乖離したイメージゆえ，その内容は話し手の同意できる内容でないことが分かる。（04）は，「ウソつけーっ！」という語からも分かるように，「朝食のあとは」以降，とくに「自分に返るんです」あたりの自己陶酔的な語句は自分の言葉ではなく，他者の言葉を演じている。それゆえ，話し手の言葉でありながら，話し手の言葉とは乖離したものとなっている。（05）も（04）と同様で，「そういうバカな公式」という語で「カッコイー，スマート」の語句に反発を抱いていることが分かる。

たしかに「みたいな。」は，それが受ける語句を，たとえ自分が発話した内容であっても，それに対して違和感や反感反発を抱いている。これは「みたいな。」で受ける部分を自分自身の発話ではないと客観視する用法であることが確認できる。

4.2. 「みたいだ」

「みたいな。」が言語主体とは別の存在を想定した表現を作り出すことが確認できたが，これは「みたいな。」という形態を取ったときのみだろうか。たしかに「みたいな。」という形態であれば，反感反発を表明していることが顕在化するが，「みたいだ」ではどうだろうか。

（06）「人間の背中にくっついているときの方が，暖かい。でも人間どうしはあまりくっつかないみたいだ。なぜ人間たちはあんなによそよそしくしあうのかと，私はときおり不思議に思う。」
（川上弘美『龍宮』2002）

（07）「この病院生活の何カ月かで，僕は本当に病気になってしまったみたいだ。ほかの人たちにおかしいっていわれても当たり前かもしれない。」
（蔵谷浩司『子どもの心を鍛える学校』2002）

（08）男は呆れたように竹田をふり返って，「おい，この兄さん，口のきき方も知らねえみたいだぜ。いくら田舎者だって，挨拶ぐらいはできそうなもんじゃねえか」「すんません，
（五木寛之『青春の門 堕落篇 下』1977）

（09）「それが，何を表しているのかわからないのだ。時計の読み方を忘れてしまったみたいだ。時を刻む音だけが，頭の中に響きわたる。かち，かち，かち，かち。頭が痛い。」
（北野勇作『昔，火星のあった場所』2001）

「みたいな。」ほどではないが，「みたいだ」においても，それが受ける語句を言語主体が違和感や反感反発が顕在化している。

（04）は，「私は不思議に思う」という語句からも分かるように，発話主体は人間どうしがくっつかないことが「不思議」だと違和感を覚えているのが分かる。（05）は，もともと病気ではなかった話し手が病院生活のせいで本当に病気になってしまったという，他者に対して反感を抱いているのが分かる。（06）も，話し手の「挨拶」もできない「兄さん」に対して「口のきき方も知ら」ないとして反感を抱いているのが分かる。最後の（07）は，あまり当然な時計の読み方すら忘れてしまったという通常ではありえない事態に当惑している様子がうかがえる。

以上からも分かるように，「みたいだ」は，「みたいな。」ほどではないにしろ，それが受ける内容を否定的なものととらえるパターンが顕在化する。

したがって，「みたいだ」は，それを受ける内容を話し手が否定的にとらえるという意味を表す形態であることが確認できた。

4.3. 「ようだ」

つぎに，「ようだ」の分析である。「ようだ」は「みたいだ」や「めり」のように一見して視覚に関する形態素を確認することはできない。そんな「ようだ」も「みたいだ」や「めり」同様，二重主体構造を形成しているのだろうか。

(10)「幸江の笑顔を見るのは一年ぶりだ。家中が明るくなったようだ。二学期が始まっても，まだ夏休みの宿題をやっていたが，提出日には間にあったようだ。」　（小川美沙『わが家の薬害戦争』1998）

(11)「生きている。見たところ，どこにも傷はない。気を失っているだけのようだ。血まみれの邸での唯一の生存者，あの女性の乳母に違いない。夏樹は，ホッと安堵の」

（瀬川貴次『凶剣凍夜　暗夜鬼譚』2003）

(12)「「…あさっては二百五十に下がるよ」と喜んでいる。少しずつ物流は始まっているようだ。しかし，値段が下がったところで，市民には現金収入がない。」

（安田純平『囚われのイラク　混迷の「戦後復興」』2004）

(13)「もともと大学で化学系の勉強をしていたのが，呑み込みをはやくさせたようだ。「自分で納得できるものがなかなかできない」と中上さんは，技術者の口調になって」

（鎌田慧『日本列島を往く』2005）

(14)「中山自身も，今年後半のコンディションの安定ぶりには満足しているようだ。その結果として，ファーストステージの4ゴールに対して，セカンドステージでは一気に」

（前島芳雄『ストライカー』2001年１月号）

(10) は，「ようだ」が「家の中が明るくなった」を受けるが，これに反する主体の存在は確認できない。(11) においても，「ようだ」が受ける「気を失っているだけ」は，主体の判断ではあるが，主体の存在はこれしかない。「あの女性の乳母に違いない」という主体の意思を感じさせる語句があるが，「気を失っているだけ」と対立するものではない。(13) は「呑み込みをはやくさせた」という，主体が肯定的に捉えた事象と「技術者の口調になって」という，これまた肯定的な捉え方の間に対立的なものはない。(14) も「コンディションの安定ぶりに満足している」という部分と，その後に続く「その結果として」という表現や「セカンドステージでは一気に」という表現からは，対立するもうひとつの主体の存在というものは感じられない。

結局，「ようだ」が用いられる場合，それを受ける語句に対して，言語主体は単一であり，「みたいだ」や「めり」に見られるような「二重主体構造」は存在しないと言わざるをえない。

5. 論　　証

本論は，視覚に依拠する判断系助動詞の「みたいだ」と「めり」に見られるような，「二重主体構造」が「ようだ」にも見られることによって，これら３つの助動詞が共通する構造のもとにあることを立証することが目的であった。しかし，さきの検証の結果にあるように，「ようだ」には，その「二重主体構造」が見られなかった。そうなると，「ようだ」は，視覚に依拠する助動詞であっても，「みたいだ」や「めり」とは同じ構造を持たいないことになる。

5.1. 「「ようだ」＋（一人称）」

さきの検証で「ようだ」には，単一の言語主体の意思しか見当たらず，「二重主体構造」を形成するもうひとつの主体が存在しないことがわかった。であるならば，主体の存在が明示されいてる用例，たとえば文中に「私」や「僕」，「おれ」などの一人称語彙が存在する用例，を分析したらどうだろうか。可能性はふたつ考えられる。ひとつは，たとえ主体を明示する語があって

も，そもそもそこに二重主体構造は存在しないのだから，さきの「ようだ」の検証と同じ結果となる。もうひとつは，主体を表現する一人称語彙によって，主体の存在が明確になる可能性が出てくる。

言語主体を表現する可能性のある一人称語彙が「ようだ」の近くに共起する用例を分析すると以下のような事実が得られた。

(15) 赤ら顔のおばさんがいきなり話しかけてきた。どうやら中国人かと聞いているようだ。私は「ニエット，ヤポンスカヤ」と自分を指さす。 笑って去って行ったが，
（南久美子『Never too late』2003）

(16) 屋外という開放的な雰囲気もあってか，いつの間にか相当な量の肉を平らげてしまったようだ。「おなかいっぱいで，動けない」私がそう言うと，くだんのモデル嬢曰く。
（篠藤ゆり『旅する胃袋』2002）

(17) その正体について説明させられているらしい。金属探知で，その装置が引っかかったようだ。「あのー，私，九州理科大学の客員教授をやってまして，数学基礎論をやっているのです
（梶尾真治『この胸いっぱいの愛を』2005）

(18) 少なくとも，僕としてはなかったつもりだった。だが美和子は，そうは思わなかったようだ。彼女は，笑顔にぎこちなさを滲ませた。それからアイスダンスの女性パートナーのように
（東野 圭吾『私が彼を殺した』1999）

(19)「故郷?」「ええ。魂の故郷へ」「俺は母の胎内にいたようだ。こんなことってあるのかな」「母の子宮にいた頃を思い出すのはよくあることだわ。 （なかにし礼『さくら伝説』2004）

(15) は，赤ら顔のおばさんが言語主体を中国人かと考えていることに対し，当然ながら否定的な意思をもっている。「ようだ」が受ける語句と，言語主体の意思とが対立していることが確認できる。(16) は，「ようだ」が受ける語句の内容は言語主体の行為ではあるが，自身は「相当な量の肉」を食べるべきではないという認識はあったが，結局「開放的な雰囲気」のなかで意に反して食べすぎてしまったということであるから，二つの主体とその主体間の対立が見て取れる。(17) は，この文章の言語主体ではないが，「ようだ」が受ける金属探知機に引っかかったという人物と，「私」は特に取り調べる必要のある怪しい者でないという意思が感じられる。(18) は，「僕」と「ようだ」が受ける行為の主体である「美和子」との間に対立が見られる。(19) は，「俺」が「母の胎内にいた」という事態に対して，その「俺」が「そんなことってあるのかな」と相容れない意思をもっていることを示している。

なぜ「ようだ」が受ける文，あるいはその文の近くで一人称が共起して明示されると「二重主体構造」になるのかについては，まだこれから考察しなければならない課題だが，一人称を明示しなければ表現できない，あるいは一人称を明示することによってより効果的な表現ができるのだとすれば，そこにある主体が二つ存在し，対比的な関係にあることを示すためであろうと推測することができる。

5.2. 「だろう」

念のため，視覚に依拠しない，すなわち二重主体構造を取らない助動詞「だろう」を分析したところ，結果として二重主体構造が顕在化することはなかった。

まず，一人称語彙と共起しない例である。

(20) いまは熱にうかされて話どころではないが容態が落着けば徐々に聞き出せるだろう。看護婦に頼んでおくのが最上の方法だ」柚木はすぐ宮野安希子を思い描いた。

（山崎 光夫『ジェンナーの遺言』1986）

(21) あれは，彼女の体をはった，一世一代の賭だったのだろう。脅されても，泣かされても，ボロボロになっても，彼女は彼を愛していたのだ。

（松本ありさ『次の恋までのカウント・ダウン』1992）

(22) 宅地はなお，造成されているし，今後ともあたりの丘陵の木立は伐り倒されることだろう。何しろ百万都市を東西にひかえたベッドタウンである。

（森崎和江『いのちの素顔』1994）

5.3. 「「だろう」＋（一人称）」

さらに念のため，「だろう」が一人称語彙と共起する用例を確認してみたが，こちらも二重主体構造が顕在化するということはなかった。

(23) 聴衆は私の言うことを漏らすまいと真剣に聞き，うなずく者もいた。それはそうだろう。「市民の生命・財産は保証する。今まで通りに仕事を! 武器・無線を差出せ。

（亀山哲三『南洋学院』1996）

(24) 何となくその会話には大阪人の反骨の匂いがあったゆえ，私の記憶に残ったのだろう。そしてそれは私に好もしい反応を引きおこしたからだろう。結局は司馬サンもある期間

（山野博史『発掘司馬遼太郎』2001）

(25) これはまだ「介入」の初期段階ではあるが，イメルトが新たな段階に引き上げてくれるだろう。私は，このような徹底介入の興奮が大好きだ。その興奮は徹底介入の矢面に立つ人たち

（ジャック・ウェルチ/ ジョン・A・バーン/ 宮本 喜一（訳）『ジャック・ウェルチ わが経営』2005）

(23) は，「聴衆」と「私」が対比されている。そのうえで「それはそう」が「私」にとって好ましいことになっており，主体の意思とは対立しない。(24) も，「私の記憶に残った」と「私に好もしい反応を引き起こした」のは，主体にとって対立するものではない。(25) も「ようだ」が受ける表現内容と「私は，～大好きだ」の語句は，主体にとって対立するものではない。

6. 結論ならびに考察

6.1. 仮説の可否

先の問題提起「「ようだ」は，「めり」（あるいは「みたいだ」）のように，二つの言語主体を有し，両者は相対立する関係になるか」に対し，「「ようだ」は，「二つの言語主体」を内包する意味概念の構造を有し，受ける語句は否定的な意味を有するものとなる」という仮設を立てた本論は，以上の検証と論証から，限定的ながら用例をもって立証できた。

「ようだ」単独では，上記の「二つの言語主体」や「否定的な関係」が顕在化しなかったが，一人称語彙が「ようだ」の文あるいは近接する文に明示されれば，「二つの言語主体」や「否定的な関係」が顕在化することがわかった。

6.2. 主体と視覚と判断

ここまで「二重主体構造」という表現を用いて，視覚依拠の助動詞について論じてきた。これは主体がふたりいるかのような相反する意思が同時に表現される現象をとらえたものであった。しかしながら，あるひとりの言語主体が発話している以上，現実的には，そこに主体はふたつなく，ひとつきりである。となれば，ひとつの主体がふたつに見えているだけにすぎない。

ふたつに見えていた主体は，実はひとつであるとすれば，何がふたつだったのか。ここまでの

検証と論証で分かることは，主体は，自身の頭脳における「思惟」と，自身の視覚による「描写」とによる，ふたつの表現形式を有していた，ということである。この「思惟」と「描写」が表面的にはふたつの主体として見えていたのである。「思惟」は，外部には根拠を求めず，自身の中のみに根拠を求める。きわめて純粋な主体的な判断である。一方，「描写」は，視覚情報という外部に根拠を求める。そしてその外部は，主体内部ではないという根本的な性格から，主体判断の材料にはなり得ても，主体の判断そのものにはなりえないのである。

主体は，視覚をそのように扱ってきた。われわれにとって，視覚は外部の情報を正確に収集し，的確は反応を可能にする，きわめて強力な認知機能である。しかしながら，その外部に根拠を求めるという手法が，たとえば，その外部情報が主体の意にそぐわない場合は，主体の意思とは対立するものとなってしまう。したがって，ときに「思惟」と「描写」が相反する関係となるのであった。

主体は，頭脳において思惟したものを真に自己の情報として表明し，一方視覚によって描写したものは非自己の情報として表明する，自己と非自己の情報を組み合わせた判断構造を構築している，と考えることができよう。

7. お わ り に

7.1. 残された問題点

主観的な分類から，主観的な分類とは別の客観的なデータ分析方法を模索する。ひと通りの方法では不可能であろうから，主観的な分析と客観的な分析とを重ねていくことが必要となるだろう。

7.2. 今後の展望

視覚に依拠する判断系の助動詞には，こうした得意な構造が確認できたというレベルに留まることなく，この構造がもっと根源的な構造に依拠しているのだと考えている。この３つの助動詞の分析によって得られた知見をより根源的な言語理解のため足がかりとしたい。

参 考 文 献

01）メイナード、泉子・K『談話言語学 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版、2004年10月
02）佐竹秀雄「若者言葉のレトリック」『日本語学』Vol.14、11月号、1995年11月
03）佐竹秀雄「若者言葉と文法」『日本語学』Vol.16、４月号、1997年４月
04）加藤陽子「話し言葉における発話末の「みたいな」について」日本語教育学会［編］『日本語教育』124、2005年１月
05）大場美穂子「文末に用いられる「みたいな」」慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター編『日本語と日本語教育』2009年３月、
06）福原裕一「『～みたいな』表現の分析」『国際文化研究』第19号、2013年３月
07）洞澤伸「若者たちが使用する「ぼかし言葉」”～かな、みたいな”と”～って感じ”の語用論的機能」『岐阜大学地域科学部研究報告』第28号：41-49、2011年
08）川岸克己「視覚動詞「みる」と〈断定／推量〉判断」『学習院大学上代文学研究』第22号、学習院大学上代文学研究会、1996年３月

09）川岸克己「現代日本語の判断体系における〈主体〉と〈視覚〉」『学習院大学上代文学研究』第23号、学習院大学上代文学研究会、1997年３月
10）川岸克己「〈非主体的〉推量判断としてのメリ推量」『作新国文』作新女子短期大学国文学会、1998年１月
11）現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）中納言及び少納言オンライン版（国立国語研究所）

〔2016.　9.　29　受理〕

コントリビュータ：染岡　慎一　教授（造形デザイン学科）